春風表敬

数年前からお仏壇やお墓の整理をされる方が多くなり、本坊の管理部に相談に来られます。だいだい後継者がいないので心配だと言うのがその理由です。少子高齢化という人口構成の変化がいよいよ顕在化してきたようです。

その再、よく聞くのは遺骨や先祖を粗末にするとなにか良くない事が起こるのではないかと心配されたり、遺骨に故人の霊魂が宿っているように思われている方がおられるようです。

仏教の教えでは、遺骨になにか特別な霊力が残っている考えはありません。これは宗祖・親鸞聖人のお言葉にもあるように、我が亡骸は鴨川の魚に食わせよと言われたことからも明らかです。

浄土へは信心一つで行くものです。人間関係も、地位も財産も名誉も信条も信念も娑婆のもの一切を置いていく。この身体も捨てて行きます。灰となればそれは故人のナキガラで娑婆の物です。娑婆の物は娑婆にかえすのが当然です。

その様に言われても、残された者に執着が残るため厄介なのです。

しっかりとお念仏をいただいて、娑婆を生き抜きたいものです。

亀山本徳寺
墓地管理部

真宗文化とはなにか

本徳寺では月に一回のペースでお茶の研修会が催される。茶人たちは静寂の中で所作を繰返す。静寂の中で音が鳴る。湯を茶碗に流し込む音、煤竹の茶筅の穂先が茶碗を掻く音、静寂の中にこそ確かな存在感を持つ音である。

我々が「華道、茶道など伝統文化」を身につけようとする時、そのプロセスで茶道具・華道具などのツールをいかに使うかを学ぶ。

だが要領を得たところですぐに達成できるわけではなく、日々の反復稽古、精神的あるいは肉体的な鍛錬がいかに大切である事は認めなければいけない。

伝統文化はこういった精神性・気概・心構えから生み出されたものであり、それを学ぶという事は人間が社会の構成員として獲得しなければならない営みであると言える。

識者によれば日本人の精神は中世に刻まれたと言われている。多くの人が受容した「禅」思想が大きく関わってくるからだ。鎌倉時代以降、禅宗は武士階級を中心に急速に普及する。その背景には、禅宗が重視する坐禅や公案といった修行法が、武士の精神鍛錬に合致していたことが挙げられる。

禅宗が重視する「無我」「直観」「自己超越」といった思想は、武士道の価値観である「武」の精神と深く結びつき、武士道に大きな影響を与えることになった。この世での実体験を重視し、瞑想による自己の解脱を目指す禅を通して、日本人はじめて「個人」の存在を知ったと言える。

都市民の生活の場にも浸透し、新たな規則や倫理が敷かれるようになる。規律正しい習慣的な生活は、はじめて日本人に「日常」の観念をもたらした。仏教伝来と供に日本に入ってきた茶の湯、立華、能、聞香といった伝統文化は中世の日本において禅の思想がもたらす精神性を基盤に発展した。現代においてもこれらの芸術の形は単なる娯楽ではなく、自己の内面を探求し、自己の本性を観照する手段として捉えられ、我々に心の底から沸き上がる安らぎと感動を与えてくれる。

一方、お念仏の営みが育んだ文化、つまり真宗文化とはどういったものだろうか？

禅の精神性を背景に成立し、様々な生活規範を設けてきた中世の伝統文化であるが、真宗の思想的立場からすれば、その自力作善の行法において一見相容れないものであるかもしれない。

真宗文化は禅のような自力聖道に挫折しそれを徹底したところに成立した文化である。つまり、聞法による念仏の継承と凡夫の自覚による他力救済の確信によって成り立つ文化である。

「信仰の拠り所として「内仏」荘厳を行い、聞法の実践と同朋と供に念仏を唱和すること」これが真宗文化の外観であり、「自信教人信」が内面の具体的な精神規範となる。

つまり、「自ら信じ、人に教えて信んぜしむ」これが大悲のはたらきであるという他力の自覚が真宗文化の基幹となる。

本徳寺副住職・大谷昭智